

2013年
5月27日
月曜日

原田哲史 教授（文化と社会の経済学・経済哲学）

車と犬から思うことと 機械と生き物

昨秋、トヨタのアクアと生後2カ月のトイプードルを買った。

1. 車に思うこと

車をもつのは、初めて、いや運転することさえ初めてだったから、大ごとであった。一昨年左足の手術をして、治っても再発の可能性があるので、治ってももしものときを考えると、左足を使わなくても運転できる自動車というものに乗れるように、昨年54歳で一念発起して免許を取得したのだ。

それまでは自分が出すのは筋力の及ぶ限りのことで、全力疾走しても知れていた。車はアクセルを思いっきり踏めば、破壊的なパワーが出てしまう。要はパワー出すことではなく制御すること、と自動車学校に通うなかで悟った。車は人間の道具だが、制御をしくじると機械としてひとり歩きして、人を傷つける。経

済の歴史では、産業化の初期に旧来の職人が機械に反発する状況があるが、その危機感はこれに近いだろう。

車はだんだん自分にしっくりきて、可愛く思う。これが愛車というものだと思う。

2. 犬に思うこと

犬とともに育った妻は、犬を飼うことを前から提案していた。私にはその経験がなく、仕事も忙しいので、「老後の楽しみかな」と思っていたが、なぜか私も前から、ふつくらしたぬいぐるみが好きで、おもちゃ屋さんで見付けたらつい触ってしまっていた。私の育った家庭は母が怒りっぽく、ホノボノとした雰囲気気がなかったから、それへの切望が続いていたかもしれない。

車に乗るようになって、ある日妻が「犬屋さんに行こう」と言うので、一緒に出かけたら、2件目で見たト

イプードルの、ぬいぐるみのように可愛けれど乙女チックすぎず賢そうな——福原愛よりも石川佳純と

いった(?)——雰囲気が入り、その場で決めた。「モコ」と名付けた。排泄をしつけ、肥満予防でドッグフードのみ計って与えている。手間はかかるが、その仕草の可愛いこと！感情のないぬいぐるみとは比べようもない。夫婦間で笑顔が増えた。

3. 車と犬そして経済法則

車はオプションなど付けて200万円余りだったが、犬はサークルや予防接種代など合わせても20万円ぐらいだったから、金額からすればさほど大きくない。しかし、生活での意味からすると犬の方が大きい。世話をする義務もあるからだがあるなかで、こちらの気持ちのほうが、それ以上に、感情のやり取りが、生活が潤うからである。そう

したやり取りが犬の成長と相まって進展していくなかでは、経済学の「限界効用逓減の法則」は成り立たないのではないか。この法則は、財の単位あたりの消費から得られる効用は、繰り返すごとに低減してくるといえるものである。しかし、何度もモコと遊んでいるうちに、愛情と信頼が増して、楽しさは増加する。車も可愛い、車は技能が一定のところまで高まると限界効用逓減法則が当てはまる。行先を変えて低減を和らげることはできるとしても。

生き物との間で感情のやり取りをし、それが成長するなかで信頼を築いていく関係において、数学的な経済学の法則ほどの程度当てはまるか疑問である。犬のみならず、親子の関係も似ているだろう。文化を背負った人間同士の間でもそのはずである。